

三田市
十倉遺跡

—県道三田後川上線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告—

2003年1月

兵庫県教育委員会

三田市
十倉遺跡
—県道三田後川上線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告—



2003年1月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、三田市十倉字二反長サ100 に所在する、十倉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県道三田後川上線道路改良事業に伴うものである。兵庫県北攝整備局（当時）の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成3年度に確認調査、平成4年度に全面調査を実施した。
3. 遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。
4. 写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については藤イーストマンに委託した。
5. 本書の挿図第2図「周辺の遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000『木津』を1/35,000に縮小して使用した。また、挿図第1図「遺跡の位置」は、三田市教育委員会発行の1/10,000『三田市遺跡分布図』（1989年）を使用した。
6. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(TP)を基とし、方位は国土座標V系の座標北を指す。
7. 本書の叢集・執筆は西口が行った。
8. 調査で出土した遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に、作成した写真・図版等の資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）において保管している。
9. なお、発掘調査および報告書の作成にあたっては、三田市教育委員会から御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。

本文 目 次

第Ⅰ章 はじめに.....	(1)
第1節 調査に至る経緯.....	(1)
第2節 調査の体制.....	(1)
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境.....	(2)
第1節 地理的環境.....	(2)
第2節 歴史的環境.....	(3)
第Ⅲ章 調査の概要.....	(5)
第1節 平成3年度 確認調査の概要.....	(5)
第2節 平成4年度 全面調査の概要.....	(7)
第3節 遺構について.....	(11)
第4節 遺物について.....	(15)
第Ⅳ章 まとめ.....	(19)

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置.....	(2)
第2図 周辺の遺跡.....	(4)
第3図 確認調査 グリッド土層図.....	(5)
第4図 調査区の配置図.....	(6)
第5図 A・B地区全体図.....	(8)
第6図 A地区全体図.....	(9)
第7図 B地区全体図.....	(10)
第8図 住居跡1・2平面図・断面図.....	(12)
第9図 土坑1（左）・土坑2（右）.....	(13)
第10図 清.....	(14)
第11図 柱穴1.....	(14)
第12図 出上遺物.....	(18)

表 目 次

第1表 周辺の遺跡.....	(3)
第2表 遺物観察表.....	(17)

写 真 図 版 目 次

- 写真図版 1 國土地理院 航空写真
- 写真図版 2 調査区遠景及び調査前の状況
・上 調査区遠景（南西から） ・下 調査前の状況（北から）
- 写真図版 3 平成3年度 確認調査
・上 グリッド1 　・中 グリッド4
・下 グリッド5
- 写真図版 4 平成4年度 全面調査
・上左 A地区全景（北から） 　・上右 A地区全景（南から）
・下左 B地区全景（北から） 　・下右 B地区全景（南から）
- 写真図版 5 平成4年度 A地区的遺構
・上 A地区的遺構（南から） 　・中 柱穴1・柱穴2（東から）
・下 柱穴1土器検出状況（東から）
- 写真図版 6 平成4年度 B地区的遺構I
・上 B地区的遺構（北から） 　・中 住居跡1・2（南東から）
・下 住居跡1・2（北西から）
- 写真図版 7 平成4年度 B地区的遺構II
・上 住居跡1（東壁） 　・中 住居跡1高杯出土状況（西から）
・下 土坑2（南東から）
- 写真図版 8 B地区出土の弥生土器
- 写真図版 9 A・B地区出土の土器・砾石

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

三田市北東部の羽束川流域の高平谷では、昭和56年度から平成元年度に県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査が実施され、縄文時代から江戸時代にかけて多くの遺跡が発見されている。十倉地区においても分布調査・確認調査によって弥生時代・古墳時代の住居跡が発見され、中世の十倉城跡・近世の麻田藩関連の遺構も調査されている。

今回の調査は、十倉地区を通過する県道三田・後川上線道路改良事業に先立ち実施したものである。

調査地点は県道の拡幅部分である。その西隣の水田部分では三田市教育委員会によって昭和60・61年に発掘調査が実施されており（十倉散布地A）、弥生時代後期の住居跡、奈良時代末の溝状遺構が検出されている。

三田市教育委員会の調査結果を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では、平成3年度に確認調査を実施した。その結果、拡幅工事区间延長約120m分について全面調査が必要となった。

第2節 調査の体制

発掘調査・整理作業とともに兵庫県北摂整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。発掘調査は平成3・4年度に、整理作業は平成14年度に実施し、同年度に刊行した。

1. 発掘調査

確認調査（遺跡調査番号 910042）

調査担当者 調査第2課 種定淳介

調査期間 平成4年2月25日

調査面積 24m²

全面調査（遺跡調査番号 920010）

調査担当者 調査第3班 岡崎正雄 西口圭介

調査期間 平成4年4月24日～6月8日

調査面積 541m²

2. 整理作業

出土遺物の整理については、平成4年（全面調査時）に遺物洗浄を一部実施した以外は、すべて平成14年度に実施した。

調査第2班：西口圭介

整理保存班：菱田淳子

実測・製図・レイアウト：栗山美奈・柏木明子

接合・補強・撮影補助等：岡井とし子・香川フジ子・喜多山好子・木村淑子・小寺恵美子・鈴木まき子・島村順子・中田明美・中西謙子・西口由紀・早川亜紀子・前田恭子・前田千栄子・横子ふさ恵・宮野正子・横山キクエ

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

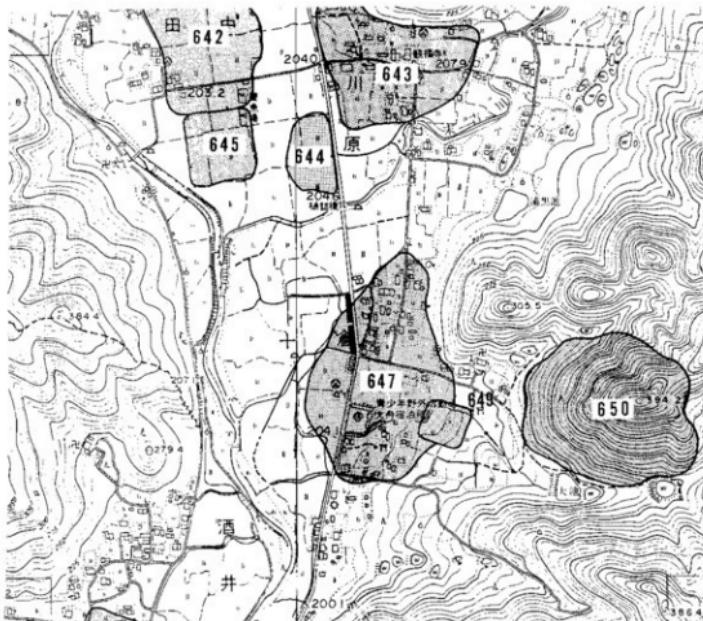
遺跡の所在する三田市は、神戸市より北へ25km、大阪より北西へ35kmで兵庫県の南東部に位置する。

三田市の南半部を中心とした地域では、近年の北摂神戸三田国際公園都市構想に基づき、JR福知山線（宝塚線）の複線電化、神戸電鉄都市公園線の敷設、中国自動車道の神戸三田インターチェンジの設置等の交通インフラの整備や、住環境の充実として北摂ニュータウンの整備が行われてきた。

一方、北部・北東部などの農村地域では、都市近郊農業をめざしては場整備事業を昭和50年代からすめてきた。十倉遺跡の所在する高平谷地域では昭和56年度よりは場整備事業を開始し、平成元年度をもって約272haの面的整備を終了している。

高平谷は三田市の北東部に位置しており、大船山連山と羽東山に囲まれた南北に細長い谷である。高平谷の中央には武庫川の支流、羽東川が南流している。

十倉遺跡は高平谷の中央にある十倉地区に位置しており、羽東川に注ぐ緩い扇状地と羽東川の段丘面上に広がる遺跡である。その中でも、今回の調査地点は、段丘の縁辺部に位置している。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

高平の名は、延久三年（1071）の太政官符に「字高平庄」とみえ、文献からは平安時代から鎌倉時代にかけては九条家などが管理した莊園であったことが判る。この高平庄の莊域は十倉・酒井・田中・川原一帯と推定されている。

室町時代には十倉に十倉城居館があり、伝承では福田氏・森本氏が拠ったとされている。

江戸時代に入ると十倉を含めた高平谷の13ヶ村は攝津麻田藩領となり明治維新まで続いている。十倉の名称は、慶長国絵図に「十倉村」と見え、江戸時代には「十倉」は周辺の村を含めた総称としても使用されていたのである。

考古資料からみる高平谷の歴史は古く、下流の木器地区にある木器莊園内遺跡から約10000年前、縄文時代早期の有舌尖頭器が採集されているほか、上流の小柿・東村遺跡からも縄文時代早期の土器・石器が出土している。縄文時代の遺跡は中期以降の遺跡が高平谷では多く確認されている。布木・堂ノ前遺跡（晚期）、酒井・門田遺跡（後期）、上櫻瀬・大藪遺跡（後期）などである。

弥生時代の遺跡は十倉遺跡の北方にある川原・早苗遺跡において前期末の土器が流路から出土している。また、中期から後期にかけての遺構・遺物は十倉遺跡において見つかっており、十倉遺跡においては後期では堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代の遺跡は生活址では十倉遺跡において堅穴住居跡が検出されているほか、川原・早苗遺跡や南方の下里・太田口遺跡において水路・焼土面などが検出されている。古墳は後期に入って塚ノ本古墳・福田古墳・大藪古墳など、十倉より下流の上櫻瀬地区を中心に横穴式石室墳が築かれてる。

奈良時代の遺跡は少なく、高平・田中城跡遺跡や下里・太田口遺跡で溝などが検出されている。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺跡は高平谷全域で確認されている。須恵器窯では、下流の木器窯群（平安時代後期）や中流の見比窯群（鎌倉時代）があり、集落遺跡では、十倉遺跡や高平・田中城跡遺跡・酒井・門田遺跡、下櫻瀬・新井遺跡、上櫻瀬・池尻遺跡などで平安時代から鎌倉時代の集落遺跡が検出されている。また、上櫻瀬・池尻遺跡では鎌倉時代の礎石建物が、小柿・中大道遺跡では石敷遺構が検出されている。

室町時代には高平・田中城跡・十倉城居館・木器城等が築かれている。十倉城居館近辺からは江戸時代のゴミ穴が検出されており、江戸時代の麻田藩代官所に関連する遺構と考えられている。

1 十倉遺跡	10 布木・堂ノ前遺跡	19 下里・太田口遺跡	28 下櫻瀬・新井遺跡
2 十倉城居館跡	11 川原・寺瀬遺跡	20 北ノ脇古墳群	29 木器4号窯
3 十倉城跡	12 高平・田中城跡	21 エン谷古墳群	30 木器・灰瓦遺跡
4 小柿・東村遺跡	13 川原・地田遺跡	22 上櫻瀬・池尻遺跡	31 木器3号窯
5 小柿・中大道遺跡	14 川原・灰原遺跡	23 大仙寺址	32 木器城跡
6 太福寺址	15 見比窯跡群	24 福田古墳	33 木器・宮北遺跡
7 慈徳寺址	16 酒井・門田遺跡	25 大藪遺跡	34 木器2号窯
8 岩井廃寺	17 大船山山頂遺跡	26 大藪古墳	35 木器莊園内遺跡
9 川原・早苗遺跡	18 塚本古墳	27 浅倉古墳群	36 木器1号窯

第1表 周辺の遺跡



第2図 周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 平成3年度 確認調査の概要

調査は工事予定地内の延長185mの区間に、6箇所のグリッド（2m×2m）を設定した。そして、各グリッドをパワーショベルを使用して掘削した後に、人力で壁面を整形し、遺構・遺物の有無を確認する方法をとった。

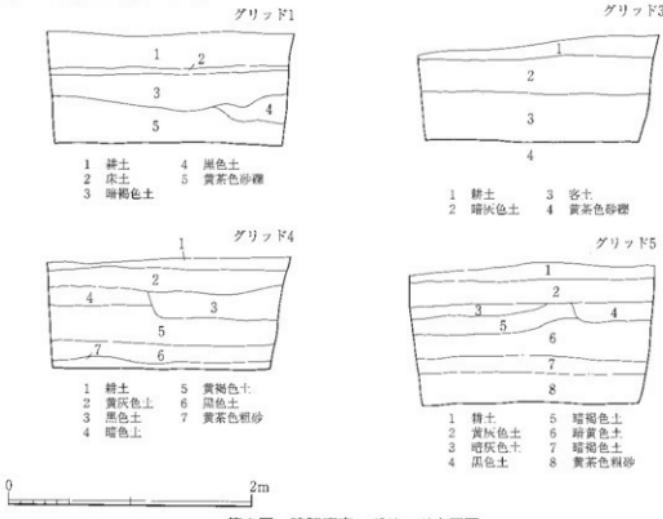
調査区は南から北に向けて標高が下がる3段の面からなる。仮に南から高位・中位・低位面と呼ぶ。この高位面にはグリッド1と2、中位面にはグリッド3、低位面にはグリッド4から6を設定した。

グリッド1とグリッド2は類似した土層堆積を示している。耕土直下に黒色土（クロボク）または暗褐色土が認められ、その様相から、この面が遺構面と想定された。グリッド3は中位面に相当するが、現耕作土面から深さ70cm～80cmまで二次的な客土が混入しており、遺構面は後世に削平されたものと考えられた。但し、近接して調査を行った三田市教育委員会の調査結果を考慮するならば、中位のグリッド3以北には遺構面が存在することが考えられた。

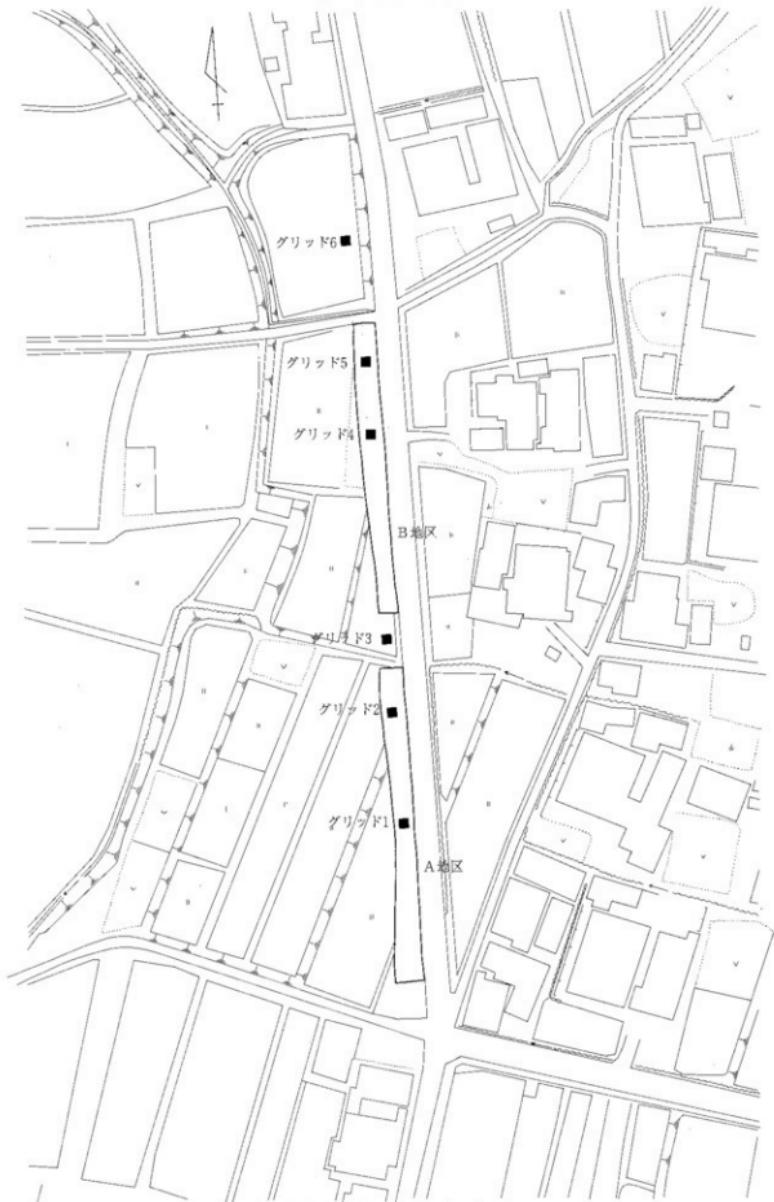
グリッド4とグリッド5では現耕作土面から深さ約35cmで暗灰色土が認められ、この面を遺構面として黒色土を埋土とする遺構が検出された。この結果は三田市教育委員会の調査結果とも矛盾するものではない。グリッド6においても耕土下に暗灰色土が認められたが、顕著な遺構は確認できなかった。

グリッド1、2、4、5から細片となった土器が出土したが、時期を明示できる資料ではない。

以上の調査結果から、グリッド1と2の高位面、グリッド3以北の中位面、グリッド4と5の低位面南部には遺構面が確認できた。



第3図 確認調査 グリッド土層図



第4図 調査区の配置図 (1/1000)

第2節 平成4年度 全面調査の概要

平成3年度の確認調査結果を受け、延長約120mの区間において全面調査を実施した。

調査は農道を挟み南側のA地区と北側のB地区に分かれる。A地区は延長63m、B地区は延長59mで共に調査区の幅は4m～5mである。A・B地区をそれぞれ約10mごとに区分し、A地区をA1区～A8区、B地区をB9区～B14区に分けた。

A地区の概要

用水路を挟みB地区の南側に設定した調査区である。延長63m、幅約4.5m～5.5m、調査面積は約300m²を測る。調査前の標高約203m～204mに位置する。現況はほ場整備が終わっているため、旧地形上に1m程度の盛り土が行われた状態である。

調査の結果、調査区の北半部より柱穴2個（柱穴1・2）を検出している。そのうちの1個には柱抜き取り時に土器を埋納している。

柱穴2個は標高約202mの暗黃灰色細砂面上から検出している。

A地区的基本的な層序は、上層から①現耕作土 ②灰色細砂（客土・盛土） ③黃灰色細砂（鉄分集積層2枚を含む旧耕作土） ④褐色シルト混り極細砂～細砂 ⑤暗黃灰色極細砂 ⑥茶灰色シルト混り細砂 ⑦黒褐色シルト混り細砂・黒灰色礫混りシルト ⑧暗黃灰色細砂である。

遺構面は、確認調査の結果からも導き出せるように⑦層の上面と考えられるが、柱穴の埋土が暗褐色土であることから、いずれも⑧層 暗黃灰色細砂上面において検出している。また、断面において、⑦層を切り込んで幅50cm～70cm・深さ約30cmの落ち込みが幾つか看取できるが、いずれも遺構とは判断できなかった。

また、断面からは⑤層上面に遺構面が看取できる。幅約30cm・深さ約40cmを割るピットが切り込んでいる。褐色シルト混り極細砂を埋土としており、あるいは柱穴1・2とともに建物を構成していた可能性も考えられる。

遺物は柱穴内より瓦器椀・土師器皿が出土している他、⑦層もしくはその上層から弥生土器片が出土している。

B地区の概要

用水路を挟みA地区的北側に設定した調査区である。延長59m、幅約4m～5m、調査面積約241m²を測る。調査前の標高約202m～202.5mに位置する。現況はほ場整備が終わっているため、旧地形上に50cm～1m程度の盛り土が行われた状態である。

調査の結果、調査区の北半部より方形土坑1基、中央部よりに方形豊穴住居跡2棟、南よりに溝1条、南端より土坑1基を検出している。

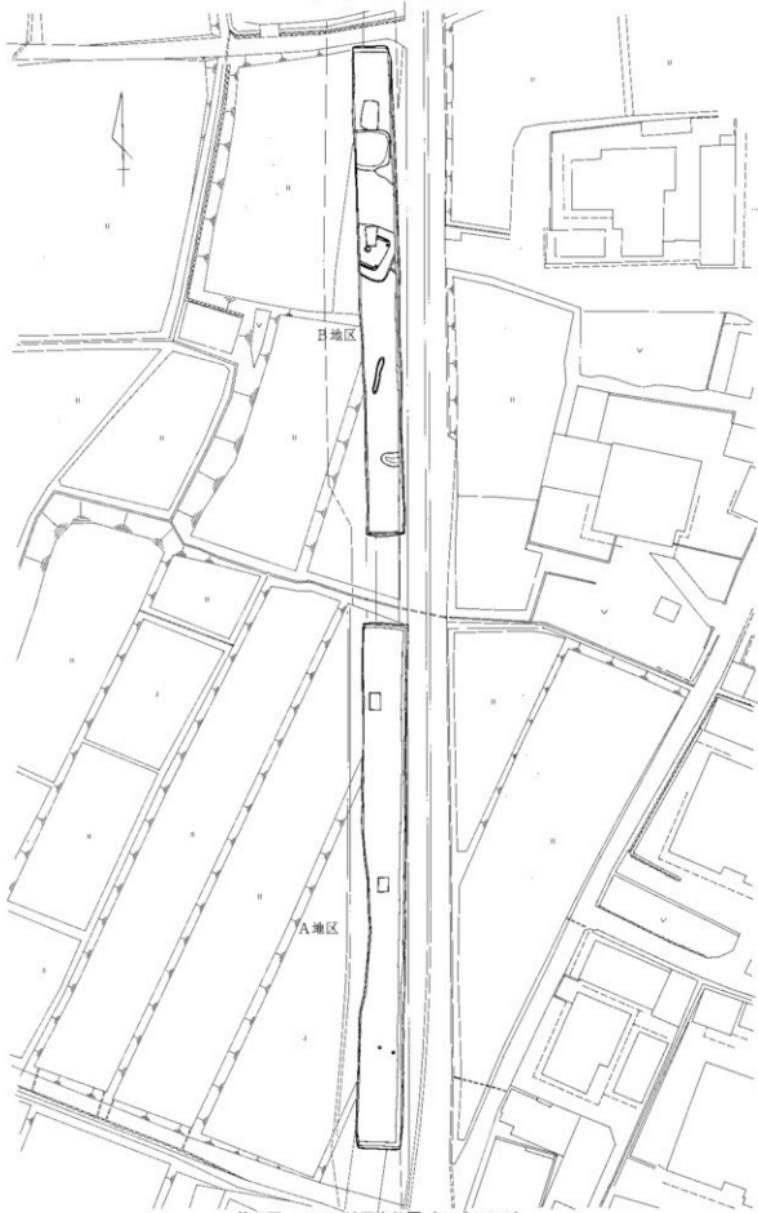
遺構は標高約201m前後の黃灰色細砂面上から検出している。

B地区的基本的な層序は、上層から①現耕作土 ②擾乱土 ③黒褐色礫混りシルト・焦茶色シルト混り細砂 ④淡茶褐色礫混りシルト・茶灰色極細砂 ⑤暗黃灰色砂礫・黃灰色中砂である。

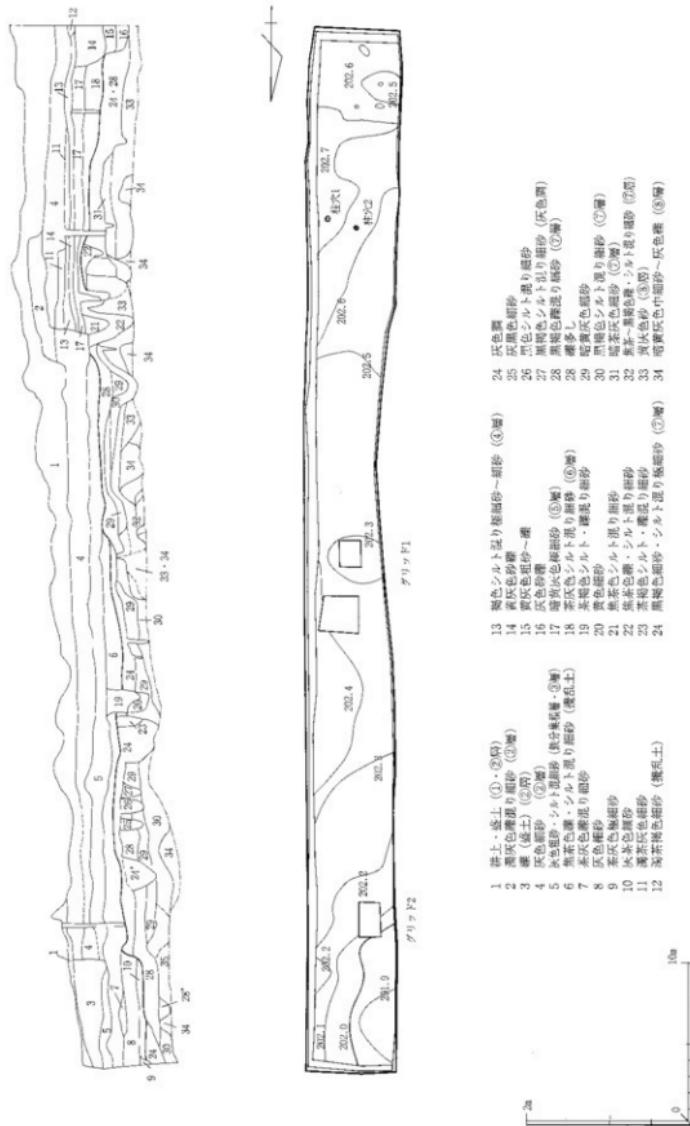
遺構面は、確認調査の結果からも導き出せるように③層の上面と考えられるが、遺構の埋土が暗茶色土であることから④層もしくは⑤層上面において検出している。

遺物は住居跡2より弥生土器・砥石が出土している他、住居跡1・土坑1より弥生土器が出土している。

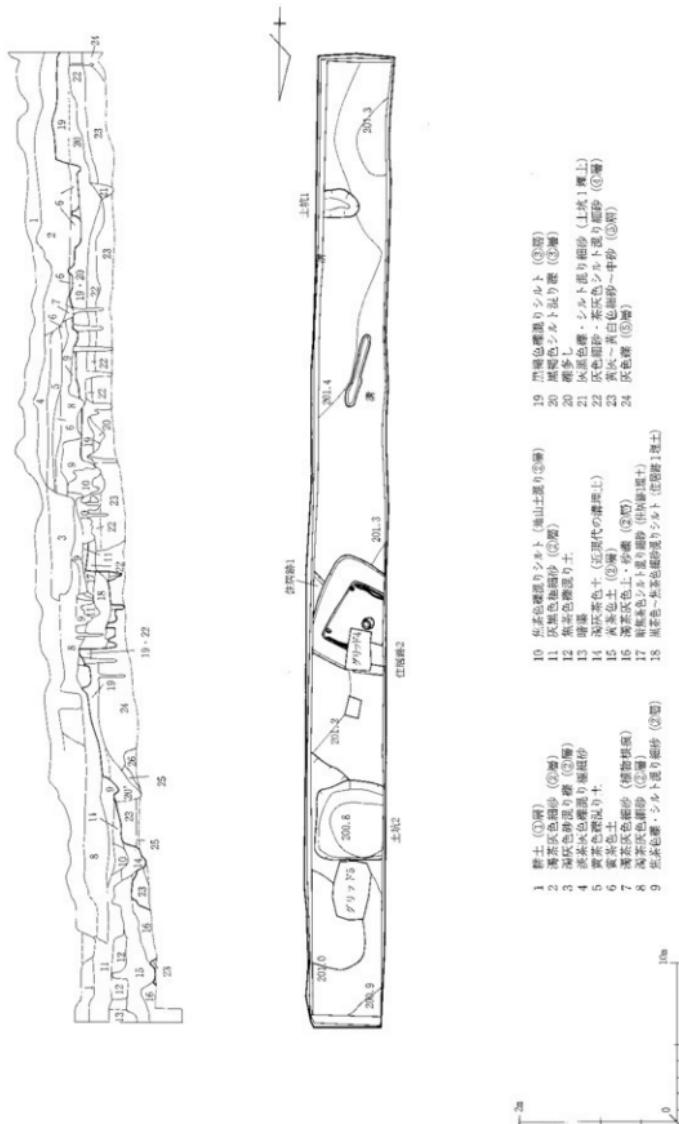
第Ⅲ章 調査の概要



第5図 A・B地区全体図 (1/600)



第Ⅳ図 A地区 全体図



第7図 B地区 全体図

第3節 遺構について

今回の調査では、A地区から鎌倉時代の柱穴2個、B地区からは弥生時代後期の住居跡2棟、同時代と考えられる土坑2基、時期不明の溝1条を検出した。

(1) 住居跡

B地区北半、B12区から方形堅穴住居跡2棟を検出している。

住居跡1

住居跡2と切り合い、古い住居跡である。焦茶色細砂混りシルトを埋土としている。

住居跡1の調査区内での遺構の残りは住居跡2によって損壊しているために非常に悪く、辛うじて南辺の一部が検出されているのみである。規模については不明な点が多いが、調査区東壁部分では住居跡2による損壊を免れており、断面からの情報ではあるが一辺の方位をN55°Wにとる、一辺約4m、深さ約40cm以上の方形堅穴住居跡が推定できる。

また、平面では明らかにできなかったが、断面では壁溝と考えられる窪みが南北両方の壁の立ち上がり部分に確認できる。推測される壁溝の幅は約25cm、深さは床面より10cmから15cmである。また、南側の焼溝は幅50cmと広く、コーナー部分に当たっている可能性も考えられる。

住居跡内からは弥生時代後期前半の高杯(9)などが出土している。

住居跡2

住居跡1と切り合い新しい、隅丸方形の堅穴住居跡である。住居跡北西半部の床面部分は、三田市教育委員会及び兵庫県教育委員会による確認調査によって部分的に調査が行われている。住居跡は灰黒色礫・シルト混り極細砂によって埋没している。

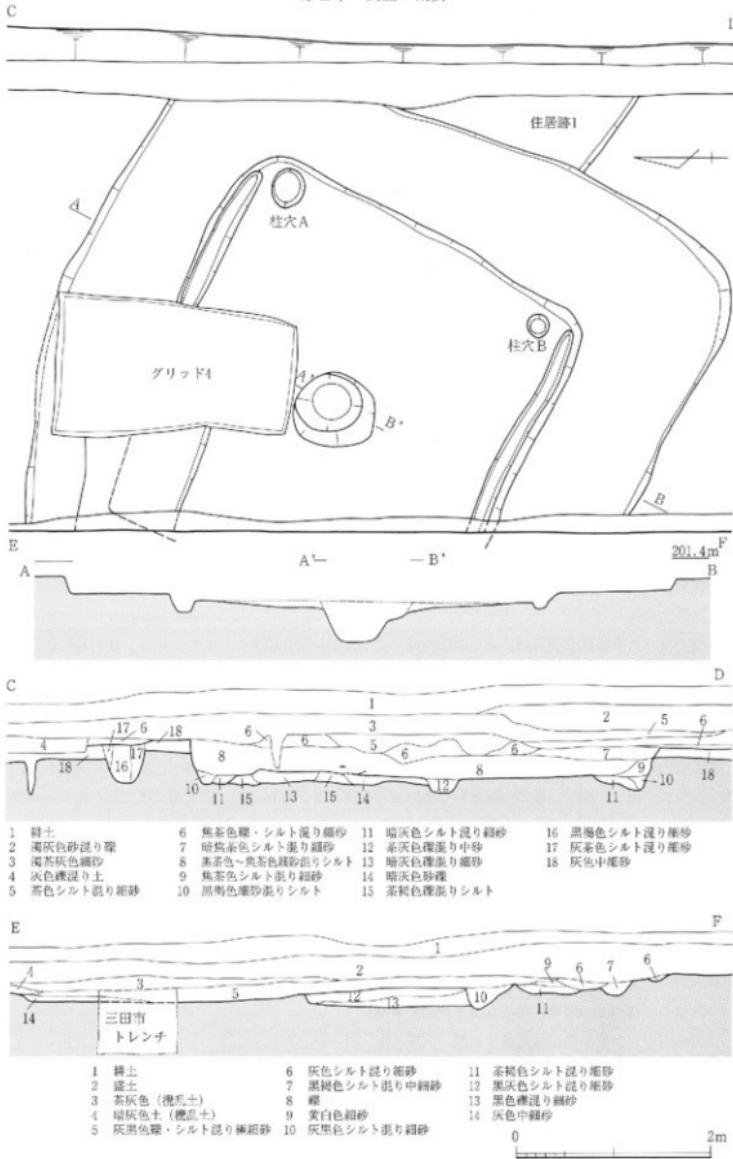
住居跡の西半部及び北東部のコーナーは調査区外にあり、今回の調査によって全貌を明らかにすることはできなかったが、一辺の方位をN28°Eにとり、一辺の規模が約6mの住居跡が推定できる。

住居跡内には幅約1m、高さ約10cmのベット状の段一屋内高床部が残っており、高床部に囲まれた内部には柱穴2個、中央穴、段の内側に沿って北側と南側に溝が存在する。高床部に囲まれた内側の規模は南北辺が4mである。この高床部は茶褐色砂礫を盛って造っており、茶褐色砂礫中からは弥生時代後期の高杯片(14)など土器が出土している。住居跡2の下層に、住居跡2の建て替えを含めた古い住居跡などの遺構が存在する可能性が考えられ(旧住居跡3)、精査を行ったが、遺構の存在は確認できなかつた。屋内高床部築造時に盛土中に遺物が混入したものと判断される。

柱穴の規模は柱穴Aが径約35cm・深さ約23cmを測り、柱穴Bは径約22cm・深さ約20cmを測る。中央土坑は黒色土によって埋没した不整な梢円形の土坑である。径約85cm×74cm、深さ約22cmを測る。段の内側の溝は共に幅約20cm前後、深さ5cm~10cmである。

住居跡内からは弥生時代後期後半の瓶・高杯・壺・壺、砥石が出土している。砥石(21)は欠損して捨てられたもので、6面が良く使用されており、鉄器の条痕も観察される。

第III章 調査の概要



第8図 住居跡 1・2 平面図・断面図

(2) 土坑

土坑は2基検出している。

土坑1

B区南端-B10区において検出した。不整な舌状の形状である。土坑は側溝を越えて調査区の東壁に延びており、全体の形状・規模は不明である。溝もしくは東側から延びた小規模な谷地形の末端である可能性も残るが、本稿では土坑として扱っておく。

埋土は下層は暗褐色混り疊砂、上層は黒褐色土が堆積している。規模は全長2.3m以上、幅1.7m、深さ25cm~44.5cmを測る。

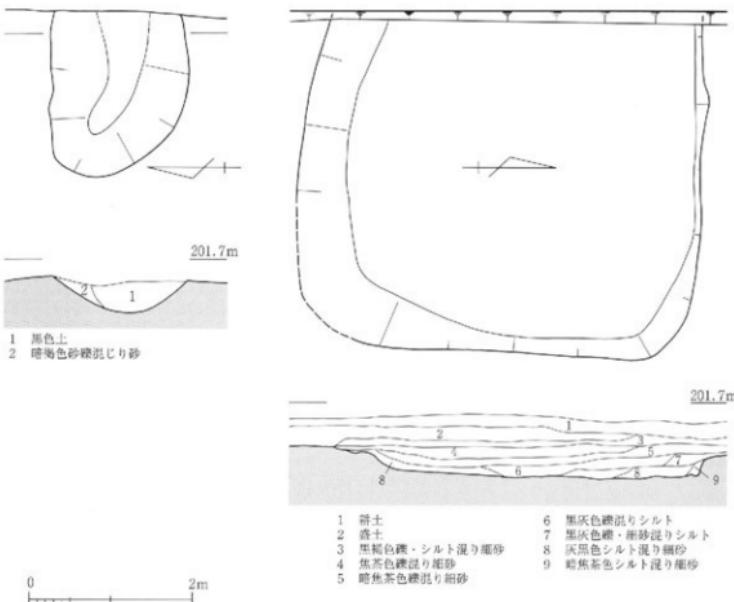
土坑内から遺物は出土しなかった。

土坑2

B区北端-B13区において検出した。不整な方形の土坑である。

土坑は側溝を越えて調査区の西壁に延びており、全体の形状・規模は不明であるが、土坑の底の形状が西壁近くで曲がりを見せはじめていることから調査区外に大きく広がる遺構ではないと考えられる。現況での規模は全長4.2m以上、幅4.9m、深さ約20cmを測る。

また、土坑の南東部分は谷地形の凹部に削られてやや不整となっている。本遺構は方形竪穴住居跡の可能性も残るが、本稿では土坑として扱っておく。



第9図 土坑1（左）・土坑2（右）

土坑は下層では黒色のシルト混り細砂、上層には黒色の細砂混りシルトが堆積しており、特に北側から数度に分かれて黒色のシルト混り細砂が流れ込んでいることが断面から見てとれる。また、最終的には上面に暗茶色礫混り細砂が流れ込んで埋没している。

土坑2は⑤層—黄灰色中砂層より掘り込まれており、埋土は下層は黒色シルト混り細砂、上層は黒灰色礫混りシルトが堆積している。

土坑内からは弥生時代後期後半の土器(14)～(16)が出土している。

(3) 溝

B区中央南よりのB11区において一条が検出されている。

溝は山地形の等高線にそって走っており、軸方位をN17°Eにとる。

規模は全長約5.0m、幅50cm、深さ約5cmを測り、断面形状は浅い皿形である。

溝は⑥層—黄灰色中砂上において検出したが、埋土は褐色土であり、③層上面から掘り込まれていた可能性が高いものである。

遺物は埋土上層から弥生土器片と時期不明の土器が若干出土しているが、遺構の時代を特定できるものではない。

(4) 柱穴

A地区から柱穴2個が検出されている。柱穴間の距離は1.85mを測る。

建物等を構成するか否かは不明である。調査区東壁にも柱穴がかかっており柱穴1から断面の柱穴までの距離は約1.7mを測る。柱穴1・2について、軸方位をN70°Wにとる櫛状の遺構の一部である可能性も考えられる。

柱穴1

掘方が一辺約30cmのやや不整な方形の柱穴である。柱痕跡の径は約20cmを測り、残存する深さは約15cmを測る。

柱根抜き取り後、土師器小皿(1)～(3)・土師器皿(4)・土師器(5)・瓦器碗(6)・須恵器鉢(7)を埋め込んでいる

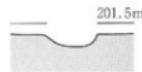
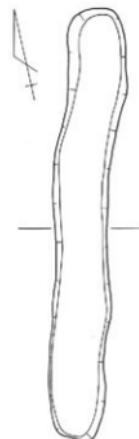
土器の時期は鎌倉時代である。

土器の出土状況から推して、柱穴1に対して、その廃絶時に丁寧な祭祀が行われた可能性が考えられる。この点からは、柱穴1は掘立柱建物を構成する柱穴であった可能性が高いと言えよう。

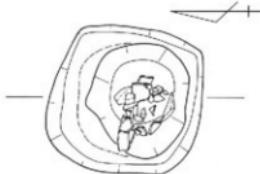
柱穴2

掘方が径約28cmの円形の柱穴である。柱痕跡の径は約16cmを測り、残存する深さは約9cmを測る。

柱穴内から遺物の出土はなかった。



第10図 溝



第11図 柱穴1

第4節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、28点入りコンテナにして6箱と少量である。遺構に伴って出土したものは、弥生時代後期の遺物と鎌倉時代の遺物である。包含層出土の遺物の大半は弥生時代後期の土器であり、それ以外には若干の中世の須恵器・土師器・瓦器が出土している。その他には、包含層中からほんの少しだけ丹波焼・肥前系陶器など近世の遺物が出土しているが、本稿では基本的には扱わなかった。

以下、遺構・包含層中を含め最も出土量の多い弥生時代後期の土器を中心に報告する。

(1) A地区の遺物

柱穴1出土の遺物

(1)～(7)は柱穴1からの出土遺物である。

(1)～(3)は土師器小皿である。何れも手づくね成形を行い、底部内面をナデ調整した後、口縁部を1段のヨコナデ調整によって仕上げている。これら3点の内、(1)は口縁部と底部の境が曖昧であり、口縁部は若干内湾気味に立ち上がる。(2)(3)は口縁部と底部の境が明瞭であり、口縁部は斜め上方に短く立ち上がっている。(3)は(1)(2)に比べて深い器形である。

(4)は土師器中皿である。手づくね成形を行い、底部内面をナデ調整した後、口縁部を2段のヨコナデ調整によって仕上げている。

(5)は土師器椀の底部である。断面三角形の高台を貼りつけている。

(6)は瓦器皿である。外面口縁部及び内面はヨコナデ調整を行い、体部外面には指押さえ痕が残る。内外面のヘラミガキは器壁の磨減が激しいため不明である。

(7)は須恵器鉢の底部である。底部外面には回転糸切りを施す。体部外面はロクロナデを施す。

包含層出土の土器

(8)は黒色土中より出土した。土師器小皿である。手づくね成形を行い、内面をハケメ調整した後、口縁部内外面を強いヨコナデ調整によって仕上げている。このため、口縁部はやや外反気味の形状となる。底部外面の調整は乏しく、指押さえ痕が残る。

(2) B地区的遺物

住居跡の遺物を中心に述べる。

住居跡1出土の遺物

(9)は住居跡1の埋土中から出土した高杯である。外反する口縁部と浅く内湾する体部からなる杯部に下半が外方に開く脚部をもつ。口縁部端と体部との境には外面に各1条づつ細い沈線が施されている。脚部下半を欠いているが、3ヵ所に円形の透かしを持つ。調整は、口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。また、体部の内外面はタテ方向のハケメの後、タテ方向のヘラミガキを施し、脚部外面には縦方向のヘラミガキを施す。脚部の裏面には放射状に板ナデを施している。

住居跡2出土の土器

(10)～(13)は住居跡2出土の土器である。

(10)は広口壺の口縁端部である。縫片のため、口径・口縁部の形状などは不明である。(17)と類似した形状であろう。端部の外面には3条の凹線を施し、その上より2個1組の、竹管文を施した円形浮文を貼付している。また、破片の内面には口縁部との接合部が残っている。

(11)は細頸壺の体部片である。本個体は、頸部・底部を欠く。体部中位に最大腹径をもつ、やや偏平

な形状である。外面は縦方向のヘラミガキの後体部の中位部分を中心に横方向のヘラミガキを施している。内面は磨滅が激しく調整は不明な点が多いが、体部下半にはヘラケズリの痕跡が残る。また、頭部付近には強いナデを施すが、頸部直下、体部上半には指揮さえ痕が顕著に残っている。

(12)は心持ち突出した形状の底部片である。内面には板ナデを施し、外側面にはナデ調整を施している。

(13)は底部に穿孔をもつ鉢もしくは壺の底部である。全体に剥離が著しく、調整については不明な点が多いが、内面には放射状のハケメが施されている。また、外側面については板ナデを施し、底面にはナデが施されている。

土坑2出土の土器

(14)～(16)は土坑2出土の土器である。

(14)は外反する口縁部と浅く内湾する体部からなる高杯の杯部片である。口縁端部は若干上方につまみ上げ、端部外側にはヨコナデによって面をもつ。口縁部端部外側及び内面はヨコナデ、口縁部外側は縦方向のハケメ、体部外側は横方向のハケメ、体部内面は横方向のヘラミガキを施す。また、外側の口縁部と体部の境目には強いヨコナデが施されている。

(15)は壺である。体部上半より上を欠く。外面は、底部外側面には横方向のタタキメ、体部下半は右上がりのタタキメ、体部中位にはハケメ調整を施す。内面は体部下半にヘラケズリを施す。

(16)は壺もしくは鉢の底部片である。平坦な径の小さな底部から体部が開く、偏平な器形である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。

包含層出土の土器

(17)～(20)は包含層出土の土器である。いずれも、住居跡2周辺の黒色土中より出土しており、住居跡2から遊離した遺物である可能性が高いものである。

(17)は広口壺の口縁端部片である。外反し水平に拡張した口縁部に外側に面をもつ端部が接合している。口縁端部の外側には2条の凹線を施し、その上より恐らく2個1組の竹管文を施している。また、内面には横方向のヘラミガキを施す。

(18)はミニチュア土器の壺である。分厚くやや突出した底部に、体部の上位に最大腹径をもち、頭部に短く立ち上がる体部と、外方へ短く開き、最大腹径を凌ぐ口径の口縁部をもつ。底部外側には木の葉の圧痕が残る。底部外側面は指揮さえ、体部はナデ、口縁部は内外面とともにヨコナデを施す。

(19)は鉢である。心持ち突出した底部から内湾気味に立ち上がる体部をもつ。底部外側には木の葉の圧痕が残る。外面はタタキの後ナデている。内面は横方向のハケメを施している。

(20)は壺もしくは鉢の底部である。底部外側はナデ調整である。体部外側は平行タタキの後、縦方向のハケメを施す。内面は横方向のハケメを施している。

住居跡2出土の砥石

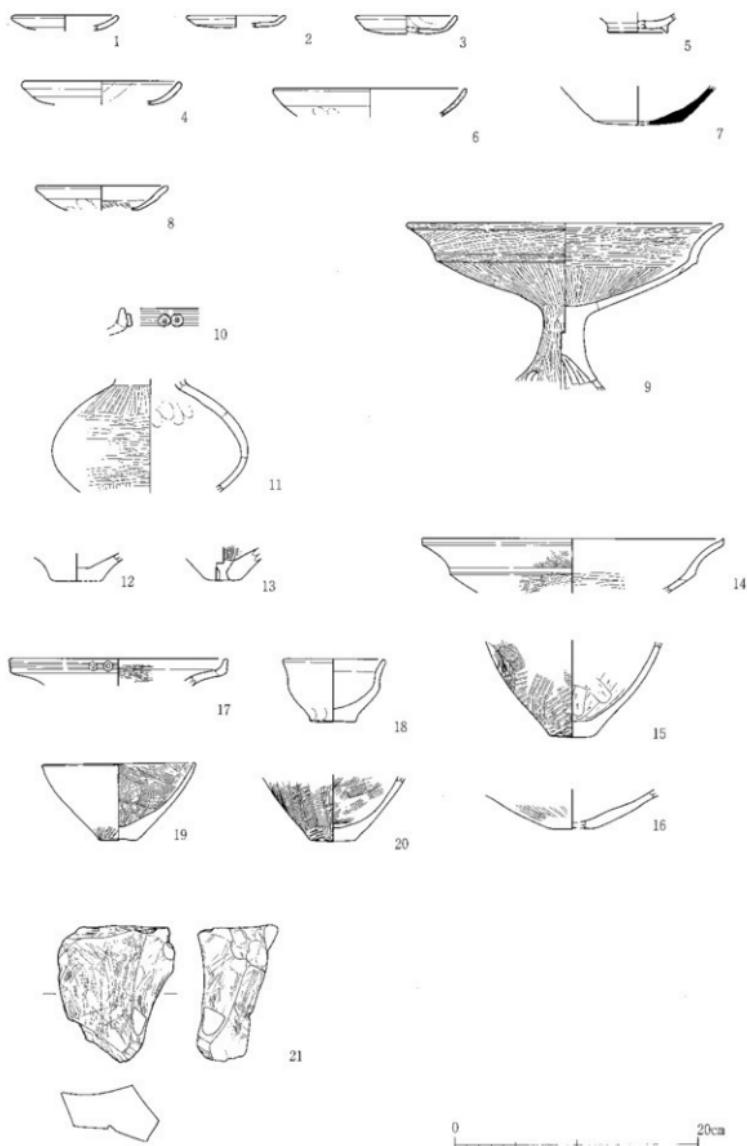
(21)は住居跡2南東隅より出土した砥石である。側面を良く使用しており、断面形状は不整な五角形を呈している。また、片方の短辺も使用しており、大まかには6面使用している。砥石の石材は非常にきめが細かい砂岩とも考えられる。

第三章 調査の概要

No	器種	口径	器高	底径(cm)	出土遺構層位	備考
土器						
1	土師器 小皿	(8.50)	1.20	(7.00)	柱穴 1	
2	土師器 小皿	(7.80)	0.95	(7.00)	柱穴 1	
3	土師器 小皿	(8.05)	1.50	(7.00)	柱穴 1	
4	土師器 皿	(12.60)	1.90	(9.60)	柱穴 1	
5	土師器 瓢		1.60 +	(4.80)	柱穴 1	
6	瓦器 瓢	(15.60)	2.30 +		柱穴 1	
7	須恵器 鉢底部		3.20 +	7.35	柱穴 1	
8	土師器 小皿	(10.50)	2.0	6.50	黒色土	
B地区						
9	弥生土器 高杯	(25.60)	13.50 +		住居跡 1	
10	弥生土器 壺口縁		1.60 +		住居跡 2	
11	弥生土器 壺		9.20 +	腹径(16.0)	住居跡 2	
12	弥生土器 麢底部		2.30 +	3.80	住居跡 2	
13	弥生土器 底部		2.60 +	3.00	住居跡 2 瓶	
14	弥生土器 高杯	(24.70)	4.50 +		土坑 1	
15	弥生土器 壺		7.90 +	3.60	土坑 1	
16	弥生土器 底部		3.20 +	(3.40)	土坑 1 壺カ	
17	弥生土器 壺口縁	(17.60)	2.20 +		黒色土	
18	弥生土器 ミニチュア壺	(8.10)	5.10	3.60	黒色土	
19	弥生土器 鉢	12.20	6.25	3.15	黒色土	
20	弥生土器 底部		5.30 +	3.80	黒色土	
石製品						
B地区						
21	石製品 砥石	11.20	9.60	4.60	610	住居跡 2

第2表 出土遺物観察表

第Ⅲ章 調査の概要



第12図 出土遺物

第Ⅳ章 ま と め

調査の結果、A地区より鎌倉時代の遺構・遺物、B地区より弥生時代後期の遺構・遺物を検出することができた⁽¹⁾。

A地区から検出された鎌倉時代の遺構は、明確なものは柱穴2個と、遺構の密度は希薄である。これは、昭和60年度に実施された三田市教育委員会の確認調査結果とも良く合致している。三田市教育委員会の調査結果では、中世の遺構はA地区よりも南側において検出されているのである。

遺構の密度が希薄である理由は、A地区が、東側の十倉城衛から広がる小規模な扇状地の末端に立地しており、現在の集落と同じく中世の集落においても端に位置していたことがあげられよう。但し、今回検出した柱穴2個からは多量の土器がその柱根上にあたる部分から出土しており、掘立柱建物の廃絶に伴う祭祀があった可能性も捨てきれない。A地区的少なくとも南半には鎌倉時代の掘立柱建物があり、後世の水田開発に伴って複数の柱穴が消滅している可能性は残るのである。

A地区的柱穴から出土した遺物には、土師器小皿・土師器皿・土師器椀・瓦器皿・須恵器鉢（もしくは碗）がある。この内、口縁部がない須恵器鉢を除く、土師器小皿・土師器皿・瓦器皿について、若干の検討を行っておく。

土師器小皿(1)～(3)・土師器皿(4)は、口縁部の整形技法に若干の違いはあるものの、何れも手づくね成形を行い、底部の調整は行わず、内面をナデ調整を行った後、口縁部端部・体部をナデで仕上げている。特に、土師器小皿(3)・土師器皿(4)は内部のナデ上げ痕が顕著である。

土師器椀については、瀬戸内沿岸から出土する12世紀～13世紀にかけての土師器椀との対比検討が必要であるが、今回出土した破片は小片であり現状では詳細は不明である。

瓦器皿については磨滅が激しく、詳細は不明である。

柱穴から出土した土師器小皿・皿はいずれも小片であり、全体に磨滅が激しく時期を確定し辛いが、昭和60年度に三田市教育委員会が調査を実施した十倉遺跡井戸出土資料に類似する土師器小皿がある。井戸出土資料は白磁碗・瓦器椀を伴っており、鎌倉時代前半と位置付けられている⁽²⁾。

柱穴1出土遺物についても同様の時期と考えても齟齬はないと考えられよう。

土師器小皿(8)は口縁部に強いナデを施し、外反気味の口縁部をもつ個体である。小片のため、時期は不明であるが、柱穴1出土遺物よりも時期が下る可能性がある。

B地区からは、堅穴住居跡2棟と土坑2基、溝1条が検出されている。

この内、時期が特定できる遺物が出土したものは、堅穴住居跡2棟（住居跡1・2）と土坑1基（土坑2）である。

B地区から出土した土器は概ね弥生時代後期の範疇で捉えられるものである。三田市域では、川除・藤ノ木遺跡において良好な資料が出土しており、編年もなされている。以下、川除・藤ノ木遺跡の成果を参考に時期の検討を行っておく⁽³⁾。

住居跡1の高杯(9)は川除・藤ノ木遺跡においては、高杯形土器C1に分類されている。高杯(9)は杯部の内口縁部高が体部高よりも低く、川除編年の2期から3期にかけての時期に対応すると考えられる。弥生時代後期前半～後期後半に入る時期が考えられるものである。

住居跡2の出土土器(10)は(17)と同形態の受け口状の形態をもつ広口壺の口縁部として図化している

が、垂下した器台の口縁部片である可能性も否めない。

(11)は扁球状の体部をもつ細頸壺の胴部である。川除・藤ノ木遺跡においては、壺形土器D1に分類されている。川除編年では細頸壺D1は主に川除編年の4期・5期に存在している。弥生時代後期後半の時期である。

土坑2の出土土器(14)は、住居跡1の高杯(9)と同様に川除・藤ノ木遺跡において、高杯形土器C1に分類されるものである。高杯(14)は高杯(9)に比べ、口縁部の外傾の度合いが強くなっている。川除編年の4期の時期に対応すると考えられる。弥生時代後期後半の時期である。

土坑2の出土土器(15)は壺の下半と考えられる。外面調整にはタタキの上からハケメ調整を施しており、内面にはヘラケズリを施している。ハケメ調整及び内面のヘラケズリは古い要素と考えられ、弥生時代後期後半にはなくなる技法である。壺(15)は弥生時代後期前半の時期が考えられる。

土坑2の出土土器(16)については壺底部と考えられるが、詳細は不明である。

(17)～(20)は黒色土出土の遺物であるが、住居跡2の遺物である可能性が高いものである。

(17)は受け口状の形態をもつ広口壺の口縁部である。川除・藤ノ木遺跡において壺形土器A3に分類されるものに類似している。川除・藤ノ木遺跡では壺形土器A3は弥生時代後期後半の時期である。

(19)は川除・藤ノ木遺跡において鉢A1に分類される。川除・藤ノ木遺跡においては鉢A1は主に川除編年の4期から顕著に見られるようになっている。弥生時代後期後半の時期である。

(20)は壺下半もしくは鉢である。土坑2の出土土器(15)に比べ、内外面にハケメ調整を施している。川除・藤ノ木遺跡においては壺は川除3期から4期にかけて内面の調整がヘラケズリからハケメ調整に変化することが判明している。このことから(20)についても弥生時代後期後半の時期が考えられる。

以上の点から、住居跡1は弥生時代後期前半から後期後半初頭と考えられ、B地区内では先行していること、住居跡1の建て替えに伴って出現した住居跡2と土坑2が弥生時代後期後半に出現したことがわかる。

十倉遺跡の弥生時代の遺構・遺物については、三田市教育委員会の昭和60年度の調査によって、竪穴住居跡を含む弥生時代後期の遺構やそれに伴う遺物が調査されている。B地区の調査成果は、三田市教育委員会の昭和60年度の調査区に隣接していることもあり、三田市教育委員会の調査成果を追認するものといえる。また、住居跡の切り合いや遺物の時期によって先後関係が判明し、遺構の変遷をささやかではあるが明らかにできたことは、十倉遺跡ひいては羽束川流域の弥生時代後期の理解に有用な資料を提示することができたと考えている。

〔註〕

(1) 弥生七器については篠宮 正氏・中世土器については岡田章一氏の教示を得た。

(2) 高島信之他 (1988) 「十倉散布地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会

(3) 山田清朝他 (1992) 『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会

写 真 図 版



写真図版 2



調査区遠景（南西から）



調査前の状況（北から）

調査区遠景及び調査前の状況



グリッド1

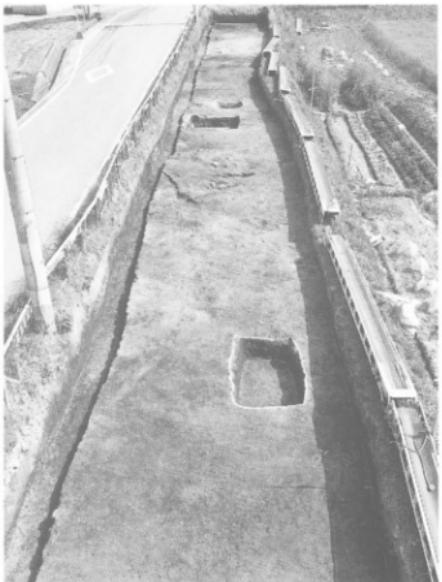
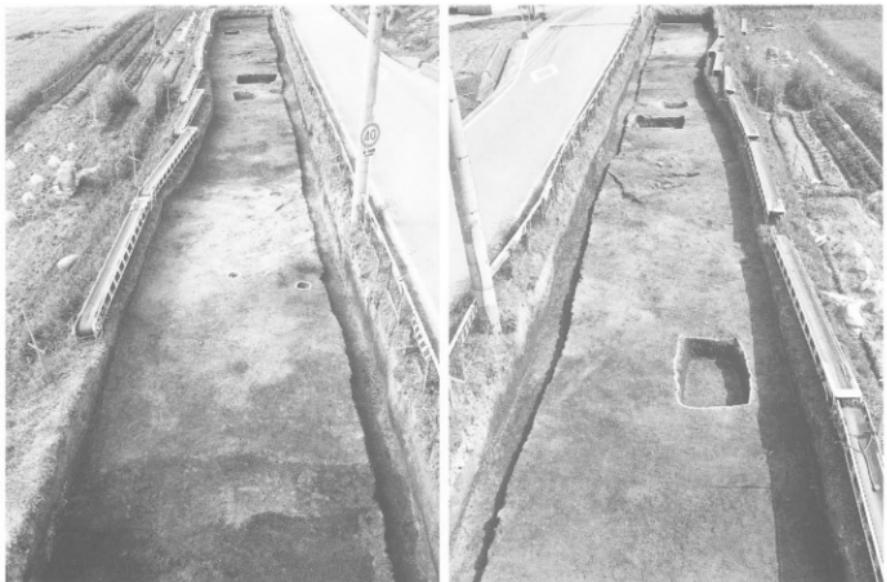


グリッド4



グリッド5

写真図版 4



上左 A地区全景（北から）

下左 B地区全景（北から）



上右 A地区全景（南から）

下右 B地区全景（南から）



A地区の遺構（南から）



柱穴1・柱穴2（東から）



柱穴1土器検出状況（東から）

平成4年度 A地区の遺構

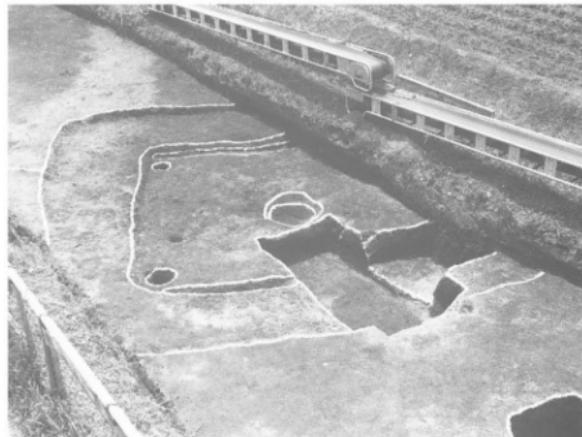
写真図版 6



B地区の遺構（北から）



住居跡1・2（南東から）



住居跡1・2（北西から）

平成4年度 B地区の遺構 I



住居跡 1 (東壁)



住居跡 1 高杯出土状況 (西から)



土坑 2 (南東から)



9



18



11



19



15

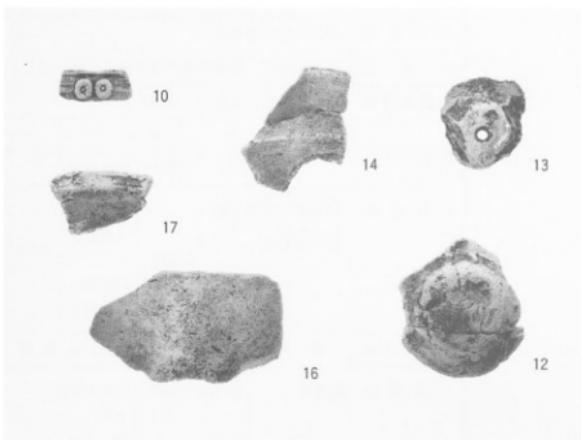


20

住居跡 1 (9)・住居跡 2 (11)・土坑 2 (15)・包含層(18~20)



A地区出土の中世土器



B地区出土の弥生土器



21

B地区住居跡2出土の砥石

A・B地区出土の土器・砥石

報告書抄録

ふりがな	とくらいせき							
書名	十倉遺跡							
調書名	県道三田後川上線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第246冊							
編著者名	西口圭介							
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711							
発行年月日	西暦 2003年1月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	調査番号					
十倉遺跡	兵庫県三田市十倉 字二反長サ	910142 (確認) 28219	34度58分 06秒	135度16分 25秒	920225 920424 ?	24 541	県道三田後 川上線道路 改良事業に 伴う 事前調査	
920010 (全面)					920608			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
十倉遺跡	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡 土坑 溝	弥生土器 砥石				
	建物跡	鎌倉時代	柱穴	土師器・瓦器・須恵器 丹波焼				

十倉遺跡発掘調査報告書

—県道三田後川上線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003(平成15)年 1月 31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078-341-7711

印 刷 株式会社 トライス

〒650-0016 神戸市中央区櫻通1丁目1-9

TEL 078-341-2241
